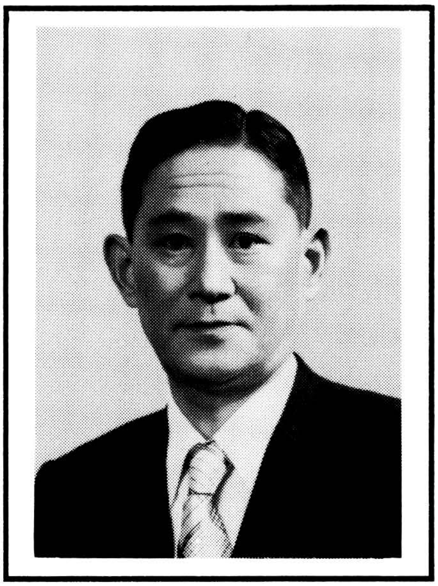
神原富民さんを偲んで

山　本　勇　麓*



昭和天皇の崩御に明けて平成と年号が改まった1989年も中国の天安門事件やソ連のペレストロイカに始まる東欧における民主化の大変動，第二次大戦以後最大のうねりを見せながら暮れようとしている。この年，品川睦明先生，神原富民さん，さらに小山睦夫君，戦中・戦後の激動と混乱期を共に過した石橋研究室縁りの方々が次々と他界され，まことに残念であり，身近とみに寂寥を覚える次第である。ここに謹んで故人のご冥福を祈ります。

さて，神原さんは去る4月27日，校務で帯広へ出張の途次車中で気分が悪くなられて病院へ運ばれたが，手当の甲斐もなく急逝された。男の平均余命80才という高齢化の時代にあってまだ60才台後半，ますます活躍されるべきいわば壮年であったのに惜しみても余りあると言わなければならない。神原さんに最後にお眼にかかったのは昭和63年10月1日，北大で挙行された日本分析化学会第37年会の懇親会であった。気のせいか，何時もの彼に似合わず何となく静かでションボリしておられたような記憶が残っている。私にとっては，数年さかのぼって昭和59年7月だったと思うが，室蘭工大における分析化学討論会の帰途，岡崎敏，中山英一郎両君の運転する車で函館へ寄り，私と同級の原田武夫君とともに神原さんを訪ねたときのことの方がむしろ鮮明な印象となっている。スシ屋でご馳走になったあと，高専校長官舎のお宅により，例によってウィスキーをガブ飲みしながら多少ロレツのまわらないベランメエ調で学問論，教育論，函館日独協会会長としての活躍などを拝聴した。

神原さんは仙台の旧制第二高等学校（現東北大教養部）へ中学四年修了で入学，昭和17年4月京都帝国大学理学部化学科入学，19年9月卒業（当時は戦時中のため3年の過程が2年に短縮された）直ちに海軍予備学生として軍務に服役，昭和20年終戦と同時に再び石橋研究室へ戻られた。

私が丁度卒業したときである。御令兄の富尚さん（静岡大学名誉教授）も海軍から帰還，アニカン（兄神），オトカン（弟神）の愛称で呼ばれ賢兄賢弟ともに研究室で活躍された。

当時は重松，藤永の両先輩はじめ軍務から戻った諸先輩はじめ，昭和21年～25年頃までの間石橋研を卒業した諸君もほとんどの人が研究室に残り賑やかであった。ときどき停電になったり，食料をはじめ物資の窮乏荒廃の極にあったが石橋研は若いエネルギーが満ち溢れ精神的にはむしろ明るく大いなる希望があった。神原さんとはよく飲んだ。研究室のアルコールから調製した合成ウィスキーを痛飲しながらマルクス論や，分析化学の在

＊広島大学名誉教授，福井工業大学副学長

りかたなど熱論したものである。彼はアルコールがあるしきい値を越えると道路上でも座ったりしてしまうので，肩を抱きながら北白川の下宿まで送ったことなどなつかしい想い出である。

神原さんの研究はポーラログラフィが中心であった。昭和23年には農学部の館研究室へ移り，29年から１年間ボン大学に留学，Stackerberg教授の許で交流ポーラログラフィを研究，32年６月立命館大学工学部教授，37年11月北海道大学理学部分析化学講座を擔任され，定年間近かに函館高等専門学校長に就任された。この間，「ポーラログラフ分析における交流電圧重畳法」により理学博士，さらに昭和44年度には「ポーラログラフィーおよびクロマトグラフィにおける拡散現象の研究」における一連の業績が評価されて日本分析化学会学会賞を受賞された。神原さんは頭脳きわめて明析，とくに拡散現象に関する解析において国際的に高く評価される独創的業績を挙げられたと思う。ポーラログラフィの指導原理であるイルコビッチ式に水銀滴の曲卒を導入して修正，さらに交流ポーラログラフィー，回転白金電極，電極反応の可逆性など鋭い理論と精密な実験を兼ね合わせた研究を展開された。北大へ移るころからポーラログラフィばかりでなく，クロマトグラフィーにおけるVan Deemten式の理論修正を液体クロマトグラフィーの方法論として電気的検出法の開拓など，分析化学の方法論における基礎的な解析，と新しい検出法に輝しい業績を挙げられた。国の内外における最も正統的な分析化学者の１人であったと思う。また，語学に堪能，論文には英語はじめ独語，フランス語も散見され，確かロシア語も得意であったと思う。

神原さんは好漢と呼ぶにふさわしいお人柄であった。彼の研究と同じく，論理は明快，正義感に溢れ盃を重ねるに従って舌峰は鋭く，いささかも乱れなかった。数多くの学会でたびたび会い，また昭和47年だったと思うが，広島において九大学理学部長会議があり，神原さんは北大理学部長事務取扱いとして来広された。あの大紛争の直後，民青系の強い北大理学部にあって学部長代行として孤軍ふんとうの様子を聞きながら１夜痛飲すたのも懐しい想い出である。民青系に対する神原さんの批判は痛烈であったが，東欧における社会主義の崩壊を見るにつけ，彼の時代批判は正確であったと今にして思うのである。好漢神原先生，やすらかにお眠り下さい。ご遺族のご安長を祈ります。

神原富民先生の御略歴

1922年神奈川県に民まれる。1944年京都帝国大学理学部化学科を卒業。理学部研究嘱託，副手，農学部副手を経て1949年農学部助手。1954年よりフンボルト財団奨励研究員としてドイツ連邦共和国ボン大学へ研究出張。1955年帰国。1957年立命館大学理工学部助教授。1960年教授。1871年理学部長事務取扱。1977年同大学大学院環境科学研究科協力講座担当。1981年同大学評議員。1983年同大学名誉教授。同年函館工業高等専門学校長。1960年理学博士（京都大学)。1969年「ポーラログラフィおよびクロマトグラフィーにおける拡散現象の研究」により日本分析化学会賞受賞。1976年日本化学会北海道支部長。1978年電気化学協会北海道支部長。1980年日本分析化学会副会長。平成元年４月27日ご逝去。